
GREATER

Ni-chaN

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

G R E A T E R

【Nコード】

N 9 9 0 6 0

【作者名】

N i - c h a n

【あらすじ】

それは人間をよりよくしたか。

創造譚（前書き）

神が人間に施した、是正措置とは一体

創造譚

「で、報告はまだかね。」

そういうと天使は神に書類を献上する。

「ここに全てのデータを集約しました。どうぞご高覧を。」

「ほう。」

神は受け取った書類に眼を通す。

「なんだこれは」

そこには人間の欲が生み出した醜態がありありと書き連ねられていた。

自然環境の破壊。

妬み、憎悪、甘え、裏切り等々の道德無き心理作用。

それに伴う社会秩序の混沌と温和な心の退廃等々。

全てを憂え終えろと神はため息をつく。

そして書類をぶちまけて叫んだ。

「人間を担当している者は誰だ、出て来い！」

神に名指された一人の天使が虚空に遊ぶ書類の紙片をかき分けおずおずと前に出て言った。

「昨今の人間の心理には、私も呆れ果てます。」

神は眼を見開いてその見解の根拠を問うた。

「と、言うと？」

何故人間の心理に呆れ果てるのか。

具体的な事例を挙げて説明してはくれないか。

私はね、人間の世界にはあまり興味が無いからできる限り詳細に頼むよ。うん。」

人間の管理を担当する天使は神に人間の態様の報告を始めた。

それに神は時折コメントをつけて返した。

「人間の世界は彼らが年号を意識し始めてから2050年という時

間が経ったそうです。

なんでもその中で神が人間を創造した際に進化と発展を助けるために授けた「欲」が、

良くない方向へと人類のベクトルを傾斜させているようなのです。

部下から報告を受けているデータを頼りに、以下具体的態様を述べあげます。」

「ふむ。」

「人間はバス・電車などという労働資本運搬容器、そうですね、いわば牛車にすし詰めにされて一人一人が目的とする場所へ集まるため日々向かうのですが、その過程において人間の欲がとくに顕著に現れているということだそうです。」

例えばその労働資本運搬容器には立ち続ける人と座り続ける人が混在していて、座り続けていた人がその権利を手放すと立ち続けていた人や新たに乗り込んできた人が権利欲しさに血眼になって椅子取りゲームを始めるだとか。

他にもいっぱいになった労働資本運搬容器に道德の欠如した人間が僅かな隙間に入り込もうとする、時間厳守という規則を守らない、道德がなっていない等々、欲を抑えきれずにモラルを蹴散らすという想像に難い現状がそこにはあるようです。」

「下らん。」

「また人間は義務を為さずに欲求に流されるままに自分に法という、そうですね、人類の決まりごとによって付与されし権利のみを叫び不満ばかりをたらしているそうです。」

「ごさかしい。」

「他にも甘えなどの欲望に支配された“金”という人間の世界における価値が具現化された物を貪り求めんとする者たちが、だましや裏切り等々卑劣な手法を使ってその価値具体化物、金をかき集めようとしているそうです。」

「なに？」

「そして思い通りにならないという欲求不満に囚われてあたりにい

る無関係の人間に日ごろの不満をぶつける、いわゆるやつあたりや陰口の横行等々。

特にこの件に関して枚挙しなければならぬ例は“殴られ屋”という商売の流行という現象です。」

「何だそれは？」

「先述いたしました価値具体化物の多寡によって人間が悩まされる「貧富の差」というものがどうやら人間界にはあるらしいのですが、それなりに価値具体化物を持っている人間があまり価値具体化物を持っていない人にそれを分け与えることによって、一定時間支払人が受領者に対し日ごろの不満を晴らすべく殴る蹴るの暴行を加え、もって精神的な満足を得て帰っていく、そしてその対価として殴られ屋が価値具体化物、金を得るという醜悪な商業体系が蔓延しているようです。」

「は？」

「さらには人間達が口にする飲食物を作成する「企業」という人間の集まりが、人間の食欲を不必要に増進させる薬物をその供給する飲料物に大量投入し、それを口にする人間が異常な購買を起こし、もって飲食物の供給者が莫大な利益を上げるという卑劣な商業が蔓延しているようです。」

さらにはそれに伴う“肥満”という人間における状態異常を治癒する薬をまたもや「企業」という人間の集まりが白々しくも供給し、莫大な富をあげるようなまったくもって無益で馬鹿げた営みがなされているというらしいのです。」

以上、神が人間に授けた欲の弊害と思しきものを、私が報告を受けた順に発表いたしました。」

今この時点で私はもっとも人と人間そのものの研究及び人間界における現地調査を進めていく必要があると考えております。

長い間人間を放っておいたという怠慢もあるのかもしれませんが、申し訳ありません神。」

天使が言い終えると神は先から震わしていた拳を振り上げて叩きつ

けた。

そして眼を見開いて憤怒する。

「私はそんなつまらぬことをさせるために人間に欲を備えたわけではないぞッ！」

人間界に雷が落ちた。

慌てふためき驚く神に召集されし、天使一同。

側近の天使たちはあたふたと神のご機嫌を取ろうとする。

そこで人間の管理を担当する天使は言った。

「ごもつともです。そこで提案なのですが、是非ここは一つ人間に是正を施してみてはいかがでしょうか」

人間担当の天使がそう言うのと地球の自然環境を管理する天使も追隨した。

「神！人間と自然との調和も考えてください！人間の欲が今自然にとつて非常に危険かつ重大な侵害の原因となっているのです！神はまた新しい惑星を、生命体を作ればいいとお考えなのですか！？それではあまりにもコストがかかります！」

「ご決断を！」

「ご決断を！」

追隨する他大多数の天使たち。

神は騒がしい天使たちを見て呆れ果てた。

これが人間の世の中か。

つまらないことに手を煩わせてくれる。

消してやろうか、でも面白くない。

それでは知恵ある動物としての人間をつくった意味が無い。
もうすこし人間を見て楽しんでいたい。

一連の思考を経て神はひらめいた。

そして騒動を起こしていた天使たちを鎮めるように言った。

「よろしい。私に良い考えが浮かんだ。皆の衆、今日はもう下がっ

てよいぞ。

人間担当の天使は、このあと私の下に来るように。」
神の口元には不適な笑みが浮かんでいた…。

「か、神！なりません！そんなことをしては！人類の文明は停止してしまう！せめて価値具体化物を無くすにとどめてください！」
人間担当の天使が叫んだ。

しかし神は反論する。

「ふざけるな！そんなことしても石ころ100個で薬草1個などといった経済ができあがってしまうだろうが！私はやる！やるぞ！」
言々と神は天使の反対を押し切って、座っていたイスから立ち上がる。

そしてそのまま手を大きく広げて何かを造物した。

そして足で円を描くと雲が穴を開け、人間界への道を示した。

神は満足げに微笑んでその人間の形をした生成物にこう言った。

「さあ行けグリーンター。人間共の欲を食らい尽くして来るのだ」

降臨譚

進藤は都内の交差点を歩いていた。

チカチカと点滅する青信号。

焦燥に背中を押され横断歩道を渡りきった進藤。

彼が振り返るとそこには赤信号。

勿論そこにはちらほらと規範を無視する人間達がこちらへ向かってくる。

進藤はそれを見て呆れた。

他方で外見も内面も全く人と変らない人間のようなグリーター。

今それは人間の世界に舞い降りた。

「さて、どうするか」

グリーターは呟いた。

人間ばかりの都内の交差点。

埋もれそうになるその真只中グリーターは辺りを見回した。

そして人間の進藤を見るや否や、グリーターは彼に声をかけたのだった。

「おい貴様」

グリーターは強めに声かけた。

「え」

進藤は不意をつかれて立ち止まる。

眼に映るのは面識のない人間である。

「私に貴様の欲を寄越せ」

グリーターは言った。

進藤は理解に苦しみグリーターにその言葉の意味を問うた。

「何・・・？何お前」

「私は強欲を食らうもの、グリーターだ。今から貴様の欲を食す。つまり貴様は自己に内在する欲を失うことになる」

進藤にはグリーターが何を言っているのかがまったくわからなかつ

た。

どこからどう切り込んでその言葉を解釈していいのかも、全く検討がつかなかった。

ひとまず進藤は興味本位で応えた。

「欲を食べる……？ 本当にお前にそんなことができるのか？ できるのだったら見せてくれよ」

グリーターは残念そうに言った。

「生憎貴様が最初だから前例は無い。貴様の欲を食さなければ、私は死ぬ。そして貴様は欲を失えばじきに死ぬ」

進藤はその背筋を凍らせた。

同時に驚いてその意味を問うた。

「なんだと！？ 死ぬ！？ 死ぬとはどういうことだ！？」

「欲が無くなれば「生きたい」だとか「何かしたい」だとか思わなくなる。何も欲しないし、欲しなくなる。そうなればお前にできることはゆっくりとただひたすらに死を待つだけだ」

信じられないことを淡々とあたかも当然のようにしゃべるグリーター。

その真に迫る論調に得体の知れない恐怖を覚えた進藤は武者震いする。

彼の心に死の恐怖が絡み付いてくる。

突発的に彼はグリーターに言った。

「なんだ突然！！ 俺が死ぬ！？ どうしてそうなる！ そしてなんで俺なんだ！ 教えてくれ！ 世の中には俺の他にもたくさん人がいるじゃないか！ もっと欲を持っている人、絶対いるだろ！」

進藤はグリーターに向かって叫んだ。

進藤に突きささる周りの視線がとても冷たい。

しかしながらそれをどうでもいいと思うくらいに彼は焦っていた。グリーターの冷静さが、なおも彼の恐怖心を煽ってゆく。

「貴様のような人間がこの世にはたくさんいるのだ。全く愚かだな貴様。人間は人間だ。能力の有無も地位の高さも財の大小も関係な

い。私はじきに全ての人間の欲を食す。問題は貴様という一人の人間の命の終わりが早いかな遅いか、それだけだ」

進藤は必死に叫んだ。

なんとしても自分の命を守りたかった。

「待ってくれ、まだやりたいことがたくさんあるんだ！俺は死にたくない！」

全く人間とは難しい生き物だ。死ねば全てが無に帰すというのに。理解できない。

グリーターがあれこれと思い悩んでいると進藤は立て続けに言った。「1週間！1週間待ってくれ！そのときにまた俺のところに来てくれ！わかるだろう俺の事！なんならメールアドレスでも電話番号でも何でも教える！だから今この時に俺の欲を食うのは勘弁してくれ！死ぬのはごめんだ！1週間後にまたここ、時計台の下に来てくれ！いいだろう！？」

彼はものすごい勢いで時計台を指差して叫んだ。

進藤の論調はもはや狂気の沙汰。

彼はその自己保存衝動に駆られてグリーターに1週間というこれといった理由も無い具体的な猶予を要求した。

グリーターはその熱意に突き動かされたのか、欲を食らう対象を変えらることにした。

「良いだろう。1週間後にまたここに来よう。だがその時には容赦なく貴様の欲を食らう。いいな。」

「約束する！1週間後だぞ！」

そう進藤が念押しするとグリーターは渋々彼の下を去って行った。人間に話しかけると色々と面倒になるという事実を学習したグリーターは、次から通告なしに人間の欲を食べようと考えに至るのだった。

グリーターはパツと進藤の前から姿を消した。

「え？」

進藤は驚き彼がどこへ消えたのかを見渡して探る。すると彼のもとにニュースが飛び込んできた。

都内のビルに貼りつけられた電光掲示板は緊急速報を伝えている。

「緊急速報です。今現在入った情報によりまずと、日本全国各地に多数の変死体が」

アナウンサーが内容を言い終える前に轟音を伴った砂嵐が画面に吹き去った後電光掲示板は止まった。

そして進藤の周りでバタバタと人間が倒れていく。

進藤はおののいた。

何が何だかわからなかった。

そして突如鼓膜を突き破るかのような凄まじい音が聞こえた。

何かと思つて見てみればそこにはおぞましい地獄絵図が展開されていた。

「何が…どうなって…」

進藤は眼を見開いた。

大破した車達。

それはスクラップの山を成している。

ぐちゃぐちゃになった死体。

それは投げ出され道路上に散乱している。

嗚咽を上げ虚ろになる人間達。

それはぐったりとして天を仰いでいる。

進藤はパニックに陥った。

すると反射的に携帯電話を取り出して言った。

「助けなくちゃ！119！そうだ！救急車を！いや、警察！？誰を呼べばいい！何を呼べばいい！どうなってる！？何がどうなってる！！！！」

あまりにすべきことが多すぎて何から手をつけていいかわからなかった。

否、こんなことが身の回りに起こったのは初めてだった。

むしろ自分が最初で最後の当事者なのかもしれない。

何かよくわからない現象が今自分の身の回りに眼の前で起きている。

まさかこれもさっきのグリーターとやらの仕業なのか。

彼は欲を食われた人間は何もしたくなくなり死ぬと言っていた。

そして自分が最初の犠牲者になると言っていた以上、さっき別れた時からついに人間の欲を食らい始めたのだ、というその推断は恐らく合っているはずだ。

そう考えると、なるほどこの現象はもつともだ。

進藤は自分で驚くほどに冷静さを取り戻した。

平常心を取り戻しつつあった進藤は、ひとまずこの惨事をなんとかしなければならないと考え行動に出た。

まず進藤は救急隊に電話をかけてみることにした。

電話が繋がった。

「もしもし！救急車を」

「それどころじゃないんだ！助けなければ！」
切れた。

諦めない進藤は次に警察へ電話をかけてみる。
つながった。

「もしもし！警察ですか」

「すぐに行く！しばし！」
切れた。

誰も頼ることができないというよりはむしろ彼らの下にも同じ現象が起きているのかもしれないということに気付いた進藤は、ついに自分が倒れている人を今ここで救済する他ないとその覚悟を決めた。決めた瞬間にはもう身体が先に動いていた。

「大丈夫ですか！しっかりして！」

進藤が倒れていた青年の肩をゆするとその虚ろな生気の無い眼と自分の眼が合った。

身の毛がよだつようなその光を失った眼を彼は生涯忘れることがで

きなかった。

その眼に驚かされてしばしの後、進藤はその青年がなにかを呟いているのを感じた。

うわごとが呟かれる口元に進藤は耳を傾けてみる。

かすかな声量ながらその内容が聞こえてきた。

「生きたくない死にたくない動きたくない食べたくない何もしたくない喋りたくない関わりたくない放っておいてほしくない行かないでほしくない関わらないでほしくない生きたくない死にたくない動きたくない食べたくない何もしたくない」

青年は虚ろな眼をしてぐったりとしながら同じ事を繰り返して呟いていた。

進藤は恐ろしさを感じた。

この青年は欲を食われたのだろうか。

欲を食われた結果がこれなのだろうか。

進藤は他にも倒れている人が眼前に広がっているのを見る。

そしてその一人一人の口元に耳を傾けてみる。

皆がその口ぐちに「ししたくない」と繰り返して呟いている。

進藤は冷や汗で身体が湿り始めるまでに恐れを覚えていた。

何をどうしたらいいのかまったくわからないが、唯一つ彼の心にはツキリしたものがあった。

「彼らを助けなければならない！」

そう思い声に出して誓った進藤は無数に倒れている人間一人一人に語気強く言った。

「こんな所で死んではダメだ！」

彼がそう言うと、青年はむくりと起き上がった。

「え…!？」

進藤はいままで死んだかのようにぐったりしていた彼がいきなり立ち上がったのを見て腰を抜かした。

起き上がった青年が言う。

「ありがとう。恩に着る」

青年はそう進藤に感謝すると足早にその場を去って行った。
味をしめた進藤は次に眼にとまった別の青年に声をかける。

「こんな所で死んではダメだ！」

しかし今度はさっきと事情が違った。

その青年は先ほどの青年を救済したときと同じ具合にはならなかった。

進藤が何度声をかけても延々とうわごとを呟くだけだった。

進藤はそれからも辺りに転がっている人間達に意欲的に声をかけたが彼らの反応は結局のところ2パターンに分かれるのみだった。

ある人はむくりと起き上がり進藤に感謝するとスタスタと元気に去って行き、

ある人は何度進藤が呼びかけても永遠にうわごとを吐き続けるのみだった。

彼は手に負えない人々はもはややむを得ないとして捨て置き、自分の家へと帰ることにした。

独り暮らしの家に帰ればテレビは砂嵐ばかり。

それでもネット環境は存続していた。

そこには国内国外問わず、世界各地での混沌とした状況が書き連ねられていた。

「前代未聞の大惨事」「人類に混沌期が訪れた」等々の書き込みが為されていた。

そして情報によればどうやら世界各国の政府機関がほぼ機能を停止し、もはや今の世界は各国が無政府状態であるかのような状態になってしまっているという。

進藤はその情報が真実であると自分が見た現状と経験に照らして判断した。

進藤の長い1週間は、こうして幕を開けた。
残り、1週間。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9906o/>

GREATER

2011年1月2日05時06分発行